高尾山報令和5年11月号毎月1回発行通巻第718号

高尾山報

令和5年11月号

宗祖弘法大師御誕生壱千二百五十年記念高野山巡拝成満

於・高野山奥之院付近にて

法の水茎

大正大学講師　髙橋秀城

(137)

「月は明月の秋を知り、花は一様の春を知る」という諺があります。「月は輝くべき秋を知って冴えわたり、花は一面の春の訪れを知って開く」という意味です。この言葉はやがて「真の友はお互いに何も語らなくても心が通じ合うたとえ」としても用いられるようになりました。

「春の花」に「秋の月」と称されるように、今も夜空には美しい月が照り輝いています。陰暦の八月十五夜と九月十三夜の名月を「二度の月」と言い、十三夜はその年の最後の月見とするところから「名残の月」と呼ばれます。お月見の季節は過ぎ去っても、まだまだ残り惜しく思います。月も同じように、秋との別れを寂しく感じているでしょうか。

見る人も
なくて散りぬる
奥山の
もみぢは夜の
錦なりけり
（『古今集』紀貫之）

（見る人もいないのに散ってしまう奥山の紅葉は、まさに「夜の錦」であることよ）

十一月に入って、あちらこちらから紅葉の便りが届いています。野山が赤や黄色に色づく景色に目を奪われますが、ふと思えば、夜も変わらず艶やかな錦の衣を纏っているのでしょう。春先の梅であれば、

春の夜の
闇はあやなし
梅の花
色こそ見えね
香やはかくる
（『古今集』凡河内躬恒）

（春の夜の闇はわけが分からない。梅の花は闇に隠れて見えないけれど、その香りまでは隠せやしないよ）

という歌があるように、香りによって存在が知られますが、秋の紅葉となるとそうはいきません。歌に見える「夜の錦」（闇夜の錦）は「夜は美しい着物を着ても誰にも見られず全く甲斐がないこと」を表しています。たとえ明るい月光が枝先に降り注いでも、錦織りなす紅葉のお披露目は難しいでしょう。夜の帳が下りても燃えるような秋景が広がり、晩秋の風に人知れず散り急いでいる姿にも思いを馳せたいものです。

山春の開花発心進み
山夏の涼風煩悩醒む
山秋の葉落は空亦空
山冬の素雪は寂亦寂

（春山の開花に信仰の心が起こり、夏山の涼風に心の苦しみから醒める。秋山の落葉には実体がなく、冬山の白雪はひっそりとして静か）

髙尾山も錦織りなす紅葉となる

この詩は「一休さん」でお馴染みの一休宗純（一三九四～一四八一）和尚が、高野山に登られて作ったものと伝えられています。高野山の山々を眺めながら、四季折々の風情に仏様の心が詠み込まれています。法の花（仏法の花）に仏心が芽生え、法の風に煩悩（妄念）が払われ、落葉の先の青空に空（因縁）を観じ、白雪に静寂（悟りの世界）を観ているのでしょうか。秋の「空」と冬の「寂」を合わせると「空寂」となり、それは「苦しみから離れた悟りの境地そのもの」となります。高野山の自然の移り変わりとともに心が深まりゆく有り様を見つめているのでしょう。

一休さんの漢詩をめぐるお話は、次のようなものです。

一休和尚が高野山に登られて、あたりの山々を眺めながら漢詩や和歌を考えていると、そこに高野聖（高野山に住む僧侶）たちが集まってきました。一休さんとは知らない聖たちは、本当に作れるのかと口々に笑って冷やかしました。すると「一首できました。硯と紙をお貸しください」と言って、先ほどの漢詩（山

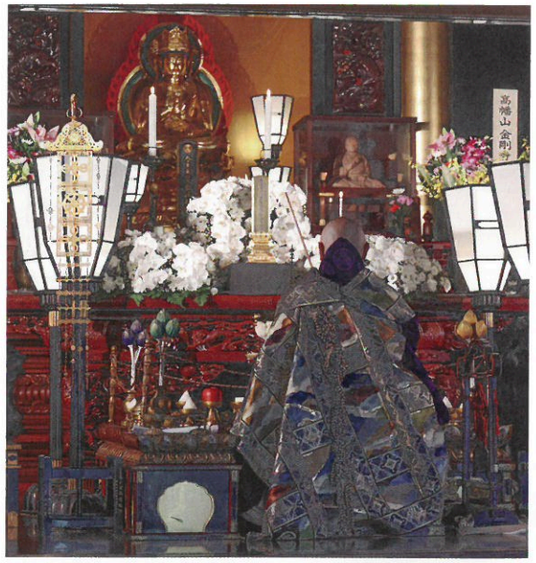
別格本山高幡山金剛寺第三十三世
川澄祐勝大和尚七回忌法要

十月三日（火）別格本山高幡山金剛寺第三十三世御貫主川澄祐勝大和尚七回忌法要が高幡山金剛寺大日堂に於いて執り行われ、当山貫首が導師をお勤め致しました。

法要には、高幡山内各御重役、法類幡山会諸大徳がご参列され、亡き大和尚の御遺徳を偲び懇ろに法会が営まれました。

祐勝大和尚は、平成元年十一月に別格本山高幡山金剛寺第三十三世の法燈を継承されました。爾来、高幡山発展にご尽力されましたが、平成二十九年十月十日、法寿八十七歳にして御遷化されました。

謹んで祐勝大和尚の仏果増進をご祈念申し上げます。



当山貫首が大導師を務め
厳かに法要が執り行われた

春の開花……）を一気に書き始めました。

聖たちは感心しました。筆跡から一休和尚と分かると、これまでの無礼を謝り、下山しようとする一休和尚を高野山に引き留めます。そして、弘法大師空海（七七四～八三五）の頂相（肖像）の賛（画に添える言葉）をお願いしたのでした。

一休和尚はお笑いになると、持ってきたお大師さまの肖像にさらさらと文字をお書きになりました。「弘法大師活仏、死ねば野はらの土となる」。聖たちは、この句に深い意味があるのだろうと思い、高野山上の学匠（学者）に見せたところ、ただ面白おかしく書かれているだけと教えられ、開いた口が塞がりませんでした。

（『一休ばなし』）

最初の漢詩とは打って変わって、お大師さまの肖像画にはやわらかな句を書き残したようです。学匠が語るように、この歌句を詮索するのは野暮なのかもしれません。お大師さまを盲目的に崇拝する高野聖への皮肉とも、あるいは高野山をお大師さまの「生ける浄土」（生き仏の浄土）として崇めた歌とも捉えることができるでしょう。一休和尚の気取らない軽やかさが伝わってくるようです。

春の花
秋の月にも
おとらぬは
深山の里の
雪のあけぼの
（『建礼門院右京大夫集』）

（春の花や秋の月にも負けず劣らず美しいのは、深い山里の雪の明け方）

一面の雪景色は、心穏やかな仏様のお姿なのでしょうか。春の花や秋の月と同じように、冬の雪霜とも「真の友達」になれたらと思います。

（栃木北部教区普濟寺）

中興俊源大徳忌法要厳修
十月四日（水）

子供達の健やかな成長を祈って　十月十七日(火)

高尾山秋季大祭厳修

山伏を先頭に長くお練りは続く

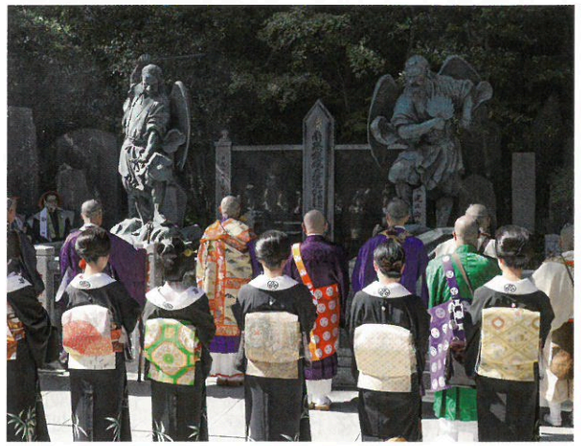
健やかな成長を願い誕生仏に甘茶を灌(そそ)ぐ

鼓笛隊の賑やかなマーチと共に進む

稚児装束の可愛らしい横川幼稚園の園児たち

有喜苑における柴燈大護摩供厳修

熱祷する佐藤貫首



一年間を共に過ごした舞扇をご供養する八王子芸妓組合の皆様

大本堂で御詠歌を奉詠

侍装束に身を固めた高尾山慶賛会の皆様

観音菩薩の宗教 ⑦1

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

如意輪観音（その9）

前号では『大日経』「具縁品」が説く胎蔵曼荼羅の蓮華部院には七尊の名のみが挙がるのに対し、日本に伝存する高雄曼荼羅などの同院には如意輪観音を含む二十一尊が描かれていることを見た。「具縁品」は文字による言語資料であるが、これを視覚化したのが曼荼羅である。思想・哲学の視覚化は密教の一大特色で、初期密教から現存の曼荼羅にいたるまでには複雑な経緯と時間を要したが、その基本には仏菩薩などの諸尊を肉眼で見ることがあった。仏を見る、あるいはその目的のために可視化・視覚化するとはいかなることか。今回はそれについて少考を試みよう。

仏教の思想を可視化したものには仏像や仏画、さらには仏具や建築などがある。なかでも如来や菩薩を描いた彫刻や絵画は、各地の博物館などにおける企画展で多くの人々の関心を呼んでいる。こうした仏像・仏画に関心を寄せる現代人の多くは、それらを美術品あるいは芸術作品として鑑賞していると考えられる。その一証左として、博物館では展示された仏像・仏画の前で合掌したり、拝礼したりする人の少ないことが挙げられよう。一方で、同じ尊像が寺院にあるときは、人々は合掌供養しており、両者の大きな違いを見ることができる。

筆者はそうした違いを目睹している。二〇一七年、興福寺の北円堂の弥勒如来と無著・世親像が東京国立博物館の「興福寺中金堂再建記念特別展『運慶』」に「展示」された。その際、人々は像の前で「見学」するのみであったが、同年、諸像が北円堂に戻ったおりは、人々はみな恭しく頭を垂れ合掌していた。展覧会では「見学・見物」、寺院では「参拝・礼拝」と同じ人物が環境によって態度を変えているのか、あるいは訪れる人々が異っているのか不明であるが、来訪者の態度が相違するのは明らかであった。かくいう筆者自身は、尊像が研究対象である以前に供養処であるから、美術展と言えども参拝して観察するのを常とする。また、これも筆者の主観的判断であるが、尊像の話をする際、例えば「顔」というか「お顔」というかの相違にも、仏像に対する意識の相違が現れるのではなかろうか。すなわち、美術・芸術品と捉えている人は「顔」といい、帰依の対象と思っている人は「お顔」という。こうした尊像に向かった時の態度や言葉がひとつの基準になるとすれば、仏像を第一に芸術作品と捉えられている人が多いように思う。もちろん筆者を含め、美術品であると同時に尊崇の対象としている人もいるであろうが。

仏像を見る眼にこうした違いがありながら、本来の仏像は芸術作品としてではなく供養の対象として「ほとけ」を視覚化したものである。仏像研究者の長岡龍作は、小編ながら名編たる『日本の仏像』（中公新書、二〇〇九年）の冒頭で、仏像は美術品としてではなく祈りの対象として造られたものだという大前提を示している。同書の「まえがき」には、「美術という見方が仏像が造られた時代になかったのはもちろん」で、「仏像はまぎれもなく『信仰の対象』で」あり、「仏像は祈りを捧げるために造られる」とされている（i～ii頁）。このことを押さえておかない限り、宗教「美術」の研究は技術や歴史の面に限定され、その深奥にある精神の理解には到達しないであろう。

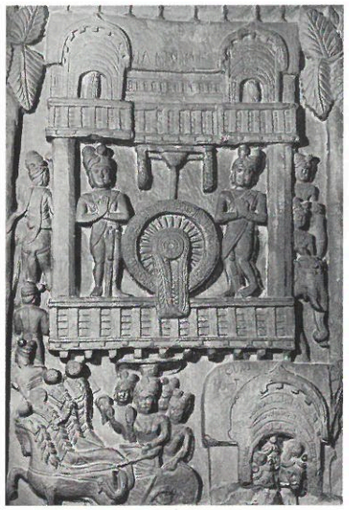
密教美術の代表である曼荼羅も同様であるが、曼荼羅にいたるまでには長い時間と段階を要した。そもそも、仏像の起源はブッダ像の製作に始まる。しかしながら、初期の仏教徒はブッダの姿を可視化する表現を行なわなかった。インドのガンダーラやマトゥラーで最初期の仏像が現れる以前、紀元前二世紀～一世紀のバールフトやサーンチーに残るブッダの伝記の浮彫には、ブッダの身体の代わりにそのシンボルである法輪や菩提樹などが刻まれるのみであった。その後、ブッダの足型を示す仏足石（Buddhapada）が現れるが、初めてのブッダ像が製作されたのは西

暦紀元百年前後まで俟たねばならなかった。

仏像が造られなかった理由は種々に論じられているが、ガンダーラ仏教美術史家の田辺理は、以下のごとく大別して三点を挙げている（「見えない仏陀から見える仏陀へ――仏陀可視化と仏像の起源について――」Waseda Rilas Journal No.4、二〇一六年、二九五～二九六頁）。第一に、そもそも古代インド人には仏像を作成する習慣がなかった。第二に、完全に涅槃に入ったブッダは超感覚的、超自然的であり聖なる礼拝物によって象徴的に表す以外に方法がなかった。第三に、ブッダは三十二相八十種好（相好）という特殊な身体的特色を有しており、それを表現するとグロテスクになるし、技術的にも不可能であった。これら三つの理由はいずれも説得力のある見解であるが、ことに日本では仏像の起源について膨大な研究をした高田修の影響力もあって、第二点に類する内容を説く人が多い。高田修は『増一阿含経』巻二一（二九・六）の「如来の身は不可思議である、如来の身は造作することも、またこれを模則して長いとか短いとかいうこともできない」や、同経（巻二二（三〇・三二））の「如来はこの世界で最も尊く、諸天（神々）の中にもこれと等しいものはなく、また像貌することもできない」を引き、この経文を「偉大で特別な存在、神以上の神であるがゆえに、普通の人間の能力ではこれを具体的に色や形で表出することが不可能」と解釈している。そのうえで、かかる考えは仏像を「制作し表現する側の人々を含めた一般信者たちの考え方、むしろ信仰であった」と述べている（『仏像の誕生』岩波新書、一九八七年、四三～四四頁）。

長らく仏の造形が不可能とされながらも、ヘレニズムの影響下のガンダーラや、インドの伝統に根ざしたマトゥラーで仏像は造られるにいたった。その背景には、ブッダの生前、涅槃後を問わず、ブッダを目視することは熱心な仏教徒にとって切実な願いであったことがある。しかし現実にブッダのみならず尊格を見ることは容易いことではない。修業中のインドの無著（アサンガ）が、深い慈悲心から自らの脚の肉を削ぎ、皮膚の爛れた犬とそこに集る蛆を助けた時に弥勒菩薩を見たというチベットの伝承や（拙著『文学・美術に見る仏教の生死観』NHK出版、二〇一二年、七三～七五頁）、凍てつく那智の瀧に打たれるなど命がけの行をした日本の文覚上人が不動明王の姿を見たとする『平家物語』の話（同書、一四〇～一四三頁）は、仏を肉眼で見ることの困難さを伝えている。かかる例は仏の姿のないところから行や念を通じて仏を見ることで、観仏とか見仏といわれる。一般的に観仏とは、仏身の相好や功徳を念観、観想することで、見仏とは三昧中に仏身を眼のあたりに見ることとされるが、両者がはっきり峻別されずに用いられる例もある（大南龍昇「三昧経典における見仏と観仏」『印度學佛教學研究』23巻2号、一九七五年、七三二頁）。いずれにせよ、仏教徒はあらゆる形、精神を尽して仏の姿を見ようと努めてきた。

論点を曼荼羅に戻そう。視覚化された曼荼羅があれば、誰でもあらゆる仏菩薩を目視できる。曼荼羅の前に身を置けば、過酷な行も念も必要ない。曼荼羅研究の泰斗・石田尚豊は、曼荼羅など「密教絵画の研究は美術史学・図像学・歴史学といった複合的な研究法を必要とする」にもかかわらず、密教絵画には「美的感動の底に」「力」があるとし、氏は多年の研究により、その「力」は「観想」すなわち「仏を観る」ことだと考えるようになったという（『日本の美術』No.33「密教画」、至文堂、一九六九年、一七頁）。まさに曼荼羅の本旨は、信心に基づく仏とその世界の視覚化である。



波斯匿王《はしのくおう》の帰依。バールフト出土。コルコタ・インド美術館蔵（金岡秀友［解説］・田枝幹宏［写真］『釈尊その生涯』大学教育社、一九八五年、八八頁より）。合掌する王の前のブッダは法輪で表されている。

秋深まる高尾山で修行を実践

第百二十一回 信徒峰中修行会

十月七日（土）

秋らしく気持ちの良い気候となった十月七日、高尾山内を修行道場とする「第百二十一回高尾山信徒峰中修行会」が日帰りの行程にて実施されました。

午前二時に山麓の不動院を出立した先達と修行者の約三十名の一行は、琵琶滝不動堂にて道中の無事を祈り、暗闇の中険しい六号路を進み山頂に到着、その後大本堂にて早朝の御護摩修行に参列されました。

朝食の後、修行者一行は有喜閣にて飯沢隆秀師による法話を聴講し、境内各所のお堂にて法楽をお勤めされました。

その後有喜苑において、佐藤貫首導師のもと柴燈大護摩供が厳修され、修行者の皆様も共に祈りを捧げられました。

佐藤貫首と記念撮影を行う
修行会参加の皆様

法螺の音の先導で山内を進む

東京多摩教区・萩の寺御住職
飯沢隆秀先生による法話

夜明け前の山頂で法楽をお勤めする

柴燈大護摩供にて世の平穏を一心に祈る

宗祖弘法大師 壱千二百五十年記念

高尾山内八十八大師巡拝

十月十日（火）

十月十日、澄み渡る秋空のもと高尾山内八十八大師巡りが行われ、総勢三十八名の方が参加されて高尾山中を巡拝し、お大師様（弘法大師）との御縁を深められました。

巡拝は先達の僧侶とともに、山麓の不動院から蛇滝水行道場を経由して大本堂まで徒歩練行を行い、急峻な山道では「慚愧懺悔　六根清浄」と掛念仏をお唱えしながら歩みを進め、道中で山内各所に祀られる各お大師様に法楽を捧げました。

山上に到着後には、本年で御誕生壱千二百五十年を迎えるお大師様を祀る大師堂にて、佐藤貫首導師のもと慶賛法要が行われました。

精進料理の昼食後には、一号路各所のお大師様をお参りし、山麓不動院にて巡拝の成満を御本尊様に奉告致しました。

山内各所のお大師様と御縁を結ぶ

大本坊前にて記念撮影

高尾山の昆虫 169

ムカシヤンマ

原始的な特性を持つトンボとして、ムカシトンボと並んでムカシヤンマ（昔蜻蜓）がいて共に日本固有種です。

中型のトンボで止まる時にイトトンボの様に翅を畳み、独特の姿勢を見せるやや華奢な雰囲気がするムカシトンボに比べ、ムカシヤンマはギンヤンマ大の大型種で翅を広げたまま、石や電柱はおろか人体に止まることさえも少なくありません。

私が本種を知ったのは昔の図鑑にギフヤマトンボ（岐阜山蜻蛉）の和名で載っていたのを見た時で、珍しいトンボとして紹介されていたのを覚えています。その後、古生代の形質を持つヤンマであるとしてムカシヤンマと改称されました。

ムカシトンボが高尾山に生息していることはよく知られていましたが、ムカシヤンマも確実に見られる種であることを最近になって知りました。

本種は、渓流の近くのコケのある場所を好み、産卵場所にも選びますので、裏高尾の小下沢、高尾山でも蛇滝コースでその姿を見ることができます。

オニヤンマのような雄大さや、他のヤンマに共通した華麗さはありませんが、ガッチリした武骨な容姿はとても渋く、ムカシヤンマは魅力的だと思います。

（文 松島　孝　撮影 麻生　紀章）

高尾山年代記

歴代山主の事跡をたどる 47

明治大学博物館　外山　徹

十八世秀神5　紀州家祈祷所再興

時は湯島出開帳の前年、寛政二年（一七九〇）に戻る。薬王院文書の中には、十二月の日付で、来春の出開帳実施にあたり紀伊徳川家に対して葵紋付の戸帳・水引[註1]の寄進を願い出る書面が残る。

祈祷所再興の悲願

高尾山が紀州家八代藩主重倫との間に親密な関係を築いていたことは以前に述べた通りであるが、史料上は明和九年（一七七二）から確認できる毎年の御札守の依頼を停止する旨の書状が、天明六年（一七八六）閏十月付で届いている。同様の書面が重ねて十一月付でも届いており、冒頭に「御報あい達っしそうろう」とあるのは、先の書面に対して祈祷所の継続を願う返信をしたということだろう。

その頃、和歌山藩では九代藩主治貞の下で厳しい節制による財政再建が図られていたが、状況いかんともし難く、家臣の知行・俸給の半分を借り上げるなど経済的苦境にあった。出費抑制のため布施の支出停止も止む無しという状況の中、書面には高尾山との仲介役を務め先代秀興とも懇意であった浅井庄左衛門以下、重倫側近の面々が名を連ね、御札守の停止に代わり白銀五〇枚をお供えするとあるのは、彼らにとって出来うる限りの配慮であったと考えられる。

開帳場に葵紋付の真新しい戸帳・水引が飾られた様子を示す史料はなく、先の願い書は実際に提出されたものか定かでない。御札守依頼の停止からわずか四年という時期を考えれば願い出が憚られても無理はないし、そもそも願い書を提出する伝手とおぼつかない。しかし、同時に六代藩主宗直以来の祈祷依頼や仏像・什物の寄進を記した詳細な由緒書が作成されていることは注目してよい。前年十二月の重倫の子息治宝への藩主交代を祈祷所再興の契機として意識したことが、由緒書に「岩千代（治宝の幼名）様ご息災延命のご祈祷」の文言をわざわざ記していることからも感じられる。秀神にとって紀州家祈祷所の再興は悲願であった。

紀州家江戸藩邸へ

その機会は七年後の寛政九年（一七九七）に訪れる。多摩郡荻久保村（東京都杉並区）の井川忠三郎は高尾山の古くからの護摩檀家だったが、「紀州様御出入り」の人物とされている。当時、大名・旗本は特定の町人・農民と「出入り」の関係を結んでおり、大工や経師屋なども「出入りの者」と呼ばれていたが、井川も紀州藩邸への生活物資の供給などに関与していたのかもしれない。この井川の仲介によって紀州家の江戸藩邸御用人への面会と願い出が実現することになる。

その年の一〇月一一日、秀神は江戸へ出府した。翌日、先に到着していた井川と四ツ谷新宿の旅宿で面談をしている。次の日、和歌山藩邸に程近い紀伊国坂下（現在の赤坂見附の辺り）の川端屋という茶屋に出向き、紀州藩士村岡八蔵の用人林勝右衛門に引き合わされた。ここで主人村岡への面会を願い出る。村岡は和歌山藩江戸藩邸で御広鋪御奥御用人・御勘定奉行兼帯という要職にあった。

一五日に面会が実現し、秀神は村岡宅を訪れた。夕暮れには少し早い時分だったようで、村岡はまだ帰宅しておらず、奥方の応対を受けている。この時、土産として白縮緬一反と、奥方にとのことで干菓子を携えていた。村岡が藩邸を退出した同日の暮れ六つ過ぎは、新暦では十二月二日の午後五時とすでに日没後である。村岡宅での対面はすでに辺りが夕闇に包まれてからの事であった。秀神は村岡に対し、代々の藩主から祈祷依頼があり、先代秀興の時には毎年御札守を献上してきたが、その後、祈祷は続けているものの御札守は献上しておらず、以前のように献上したいとの願い書を差出し、天明六年の白銀五〇枚寄進の件を口頭でも申し添えている。村岡は受け取った書面にじっくりと目を通し、後日こちらから返答すると述べた。

約一週間が経ち、二三日になって村岡から明日二四日九つ時過ぎ（正午過ぎ）に藩邸の広鋪中之口[註2]までお越しになるようにとの書状が届いた。翌日、時刻通り井川の案内で紀州藩邸を訪れる。玄関から御広鋪へ案内されると程なく村岡が出座、「旧例もこれ有りそうろうに付」「自今ご祈祷仰せ付けられそうろう」と書かれた書面を渡された。退出の後、村岡と同じ御用人の七名及び御広鋪御用達五名に対しお礼に回るが、祈祷を仰せ付けられた旨の口上を手札に記したものを渡しているので、あらかじめお聞き届けは織り込み済みだったようだ。

紀州家ゆかりの品々と考えられる葵紋付の什物

「御広鋪御用人」とは奥向き、つまり藩主と家族のプライベート空間を取り仕切る役である。天明六年の浅井庄左衛門らの書状には札の献上について「女中取り扱いにて」とあり、祈祷依頼への奥向きの関与が示されていた。普段は屋敷に「籠の鳥」であった大名家の婦女子にとって、寺社参詣は数少ない外出の機会で、楽しみでもあり、信心を深める契機であったと考えられる。また、八代藩主重倫の生母清信院は根来山根来寺の再興に尽くすなど、とりわけ信心の厚い人物であったが、紀州家の奥向きにそうした雰囲気のあったことが想像される。井川からは「芳村様」へも進物をという助言があったが、姓のみで呼ばれるこの人物は奥女中と推測される。井川は出入りの者だけあって、奥向きの人間関係を熟知していたのだろう。

翌二五日は村岡宅を訪問し、昨日のお礼を述べるとともに、藩主治宝へのお目見えを願い出ている。二七日になって急用が出来、滞在を切り上げざるを得なくなり、お目見えは年明けへ延期となったが、年来の祈祷所再興の宿願を果たし、二九日に帰山した。

藩主へのお目見え

明けて寛政一〇年は江戸城へ年頭御礼に登城する年にあたっており、将軍家治に謁見した翌七日、村岡を訪問し、延期となっていたお目見えを再度願い出た。二五日になって村岡から、お目見えは二八日に治宝が江戸城から帰御の折に仰せ付けられるはずとの書状が到来。翌日、御広鋪を訪ね、村岡にお礼を述べるとともに、お目見えが済んだ後、挨拶に回るべき家臣の面々について照会している。村岡の返書には、御年寄（家老）の水野飛騨守と子息水野出雲守、同じく村上与兵衛、三井孫十郎、御側御用人橋本六郎右衛門、同じく大草四郎右衛門、表御用人山本九兵衛、井田幸次郎、梅沢十助、南部市之丞、小林文八、安藤札右衛門といった藩主の側に仕える重臣の名が書き連ねられ、屋敷の所在地も付されているので、一軒ずつ出向くことになったのだろう。藩主へのお目見えとは、関係を家中にも周知される、それだけ重要な儀式だったことが実感される。

先のお目見えの日時を伝える書状には、「当事（現在の意味）厳しき御省略中につき」献上品は遠慮する旨が記されており、未だ財政再建は途上という折柄、祈祷所再興は特段の配慮によるものであったことをうかがわせる。

註1　戸帳は仏像を安置する厨子の扉を開いた開口部を縁取るように覆っている幕のこと。水引（帽額）も仏前に飾る幕の一種。

註2　中ノ口とは屋敷の敷地内にあった門のことと推定される。

おことわり　本連載では史料の引用について、適宜、読みやすく原文に手を加えています。

桑都八王子の文化と魅力を体験

わくわくフェア2023

十月二十一日(土)　主催・八王子商工会議所

十月二十一日、八王子商工会議所（樫崎博会頭）が主催する秋の恒例行事「わくわくフェア2023」が、**未来へ紡ぐ伝統文化**をテーマとして八王子市内にて開催されました。

開会にあたり、今年で三回目となる「桑都八王子パレード」が行われ、日本遺産「霊気満山　高尾山」を構成する文化財を代表し、木遣を唄う八王子消防記念会の皆様を先頭に、佐藤貫首を始めとした高尾山の山伏、そして八王子芸妓組合の芸妓衆と共に西放射線ユーロードを練り歩きました。その後、林立するビルに囲まれた横山町公園ステージにおいて、柴燈大護摩供を厳修し、多くの方々が参列され、市民安全など諸願成就を御祈念申し上げました。

また、柴燈大護摩供の後には、八王子芸妓衆による見事な「桑都の舞」が披露され、観客や道行く人々を魅了しておりました。

大勢の方々が見守り
柴燈大護摩供が厳修された

当山参与も務められる
樫崎会頭による挨拶

八王子消防記念会の木遣唄を先頭に
「桑都八王子パレード」が行われた

八王子芸妓衆による
「桑都の舞」

新内小唄喜多川流家元

喜多川保延様大本堂内にて奉納浄瑠璃

十月十四日(土)

新内小唄喜多川派家元・喜多川保延様が来山され、大本堂内にて江戸時代の八王子宿を舞台とした恋物語の新作新内「恋織雪旅桑都照」の奉納浄瑠璃を公演されました。

この物語のあらすじは、恋人が叶わぬ恋の末に高尾山奥にて心中をはかるのですが、御本尊飯縄大権現様のご利益で一命を取り留め、やがて幸せな生活を送るようになったというものです。

喜多川様は幼い頃より古典芸能の世界に入られ、日本舞踊、三味線、浄瑠璃を学ばれ、二十五歳の若さで、祖父より流派を受け継ぎ、多くの門徒をご指導なされております。古典芸能の魅力を、広く分かりやすく発信するため、挑戦されているとのことで、今後の更なる活躍をお祈り申し上げます。

御本尊様に新作の新内小唄を奉納する

佐藤貫首と記念撮影する喜多川保延様

亡き師の恩に感謝

高尾山とんとん地蔵尊会来山

十月二十四日(火)

とんとん地蔵尊会（石井忠明会長）の皆様が秋深まる高尾山に来山されました。この会は八王子の「語り部」の礎を築いた元祖とも呼ばれている菊地正先生が亡くなられた後、語り部の弟子達により結成されました。先生の命日にあたる十月二十四日に毎年来山されております。

菊地先生は八王子に残されていた千話を超える昔話を収集し、自ら昔話を語り継ぐのみならず、「語り部」を大勢育成されました。本年は菊地先生没後十七年目を迎え、先生を恩師と慕う方々が多数出席されました。

菊地先生は戦後八王子市に移住し、小学校教師から作家になり、その後禅宗（臨済宗南禅寺派）の僧侶となりました。

また、多くの著書を残されており、「母と子の川」、「野火の夜明け」を始め、八王子近郷近在の『むかしばなし』を多数発刊されております。

菊地先生を慕う弟子の皆様

宗祖弘法大師御誕生壱千二百五十年記念

高野山巡拝成満

九月二十七日（水）～二十九日（金）

本年は真言宗の宗祖弘法大師御誕生壱千二百五十年という記念の年に正当します。この勝縁にあたり九月二十七日から二十九日にかけて、当山貫首佐藤秀仁大先達発願のもと、高野山巡拝を挙行致しました。巡拝の一行は佐藤貫首をはじめとした先達衆、秀峰会、高尾山慶賛会、また一般からの参加者含め、総勢四十名以上となりました。巡拝では、お大師様が高野山を開創の後、木製の卒塔婆を建てて道標（現在は石造り町石が並ぶ）とした表参道の町石道を練行して奥之院まで参拝し、奈良県吉野郡にある竹林院の宿坊に参籠致しました。

翌日は金峯山修験本宗総本山金峯山寺に参拝し、本堂である蔵王堂において五條良知猊下にご挨拶賜りました。その後、参加者一同で法楽を捧げて法縁に浸る、巡拝の締めくくりとなりました。

この度、参加された三名の方から巡拝について感想を頂きましたので、ご紹介させて頂きます。

お大師様への感謝

関　道雄

令和五年は、弘法大師様御誕生壱千二百五十年の節目と言うことで、個人で巡拝を予定していた折り、秀峰会からのお誘いの手紙を頂き、これは飯縄様のお導きとお大師様からのお誘いと感得し、参加を決断致しました。

お大師様ゆかりの寺社では、格別なる歓待を頂き、それぞれに結縁を深める心持ちとなりました。町石道の登拝行では、佐藤御貫首様や先達の掛念仏の法螺の音が、高野山中に響き渡ることに感動し、掛念仏を貫い受け、山川草木にも感謝して登拝しました。

高野山大門でのお出迎えの際には、達成感と感謝の気持ちで心が熱くなり、奥之院御廟のお大師様にこの気持ちをお届けすることが出来、結縁を更に深めたと感じ、幸せな気持ちとなりました。

御貫首様の「今回の参集は宇宙規模の奇跡である」との御言葉は、お大師様の奇跡によって成されたと思い、参加者一同が無事に成満できたことが嬉しく思います。

最後になりますが、巡拝にご尽力頂きました関係者一同の皆様に感謝申し上げます。

高野山大門にて巡拝の道中安全を祈る

ご縁に満ちた巡拝

落合　めぐみ

弘法大師御誕生壱千二百五十年という節目に、高尾山薬王院佐藤御貫首率いる皆様方との高野山巡拝は、魂が震える忘れられない旅となり、奇跡のような巡り合いを感じた有難い参拝でした。

慈尊院では、母の慈愛に包まれるような温かさと共に母の存在に改めて感謝し、またお慕いしている丹生都比売神社では、正式参拝が叶い、貫首様の玉串奉奠はとても貴重でした。

町石道では、意気込んで準備した地下足袋で、踏みしめる度に、気持ちが引き締まりました。先達皆様方の思いやりと勇気が伝わり、六根清浄を唱える事で身体の汗と共に奥底から感謝が溢れました。まさにこれこそがお山の持つ浄化の力なのだと体感できました。

去年は母と二人の高野山参拝でしたが、今年はお大師様との距離が更に近く感じました。

お大師様やご先祖様、神仏のお計らいで結ばれた御縁。人生の中で頂く「機会」、一つ一つを大切な御縁として、更に精進する励みとして活かせればと強く願います。

巡拝の無事成満にあたり、御貫首や先達の皆様、また共に祈りを捧げた参加者の皆様に心より感謝申し上げます。

参道各所の町石を巡り険しい山道を進む

旅の仲間との絆

宮島　智世

楽しみだった修験装束を身に着けた佐藤御貫首様との高野山登拝。バスで移動する参拝組の皆様に見送られての出立です。入山直前、露払の様な一瞬の雨に心が沸き立ちました。御貫首様や先達の『慚愧懺悔』に続いて『六根清浄』と掛け念仏で登ります。

お山はとても歩きやすく、お大師様の懐に包まれている様で、いつまでも登っていたいと思う程優しく感じました。いよいよ最後の登りという処で、先達方の法螺に応えるように頭上から聞こえてきた立螺。その声に新たな力をいただき、掛け念仏よ届け！と皆で声を出し合いました。

登りきった先に出迎えに待っていて下さった皆様の姿を見た時には胸が一杯になりました。登拝組と参拝組に分かれての時間でしたが、一人で登ってきたのではなく、お大師さまと二人だけでもなく、共に旅をする皆様全員で一緒に登ってきたのだと心から感じた有り難い瞬間でした。

『南無大師遍照金剛』『南無飯縄大権現』この巡拝に関わって下さった全ての皆様に心からの感謝を申し上げます。

蔵王堂にて法楽をお勤めする

奥之院への山道には樹齢千年を超える杉木立の中に数々の供養塔が立ち並ぶ

おはなし散歩道

あなたと歩む

八王子市　池田美絵

加奈子さんは、今年の六月、市の広報誌にある記事を見つけました。「ちぎり絵教室」の生徒募集です。今まで美術的なことは学生時代のみ。でも、古希を迎えた今、「残りの人生、いろんなことにチャレンジしてみたい」と考えました。

それは、ひと回り年上だった夫が突然、この世を去ったことが関係していました。悲しみに沈んでいましたが、三回忌を過ぎ、「私が元気で前向きに過ごすことで、あの人も安心するに違いない」と、思えるようになってきたのです。

ちぎり絵は、まず下絵を用意し、台紙にトレースします。そして輪郭に合わせて和紙を手でちぎり、のりで貼っていくのです。教室に通いだした加奈子さんは、色とりどりの和紙に初めて触れ、その美しさに癒されるようでした。

でも、さっそく困ったことがありました。細かな作業をするので手元がよく見えないのです。（いやになっちゃう。年のせいね）と嘆きましたが、同時にはっとしました。（あの人の眼鏡があるじゃない！）と。

夫が細かい作業をするときにかけていた、眼鏡型の拡大鏡を思い出したのです。加奈子さんは急に夫を身近に感じてうれしくなりました。

翌月の教室から、いかつい拡大鏡が加奈子さんの相棒になりました。手元がはっきり見えて便利ですし、夫がこの拡大鏡をかけて本を読んだり、趣味のＤＩＹをしたりする姿が思い出されました。正直、少し寂しい気持ちにもなりました。

秋も深まってきました。加奈子さんは次回の作品のテーマを見つけようと、教室に行く道すがら公園に足を運びました。サザンカは花の少なくなった園内で、ひときわ鮮やかに咲いています。赤やピンクの花をびっしりと付けていました。その鮮やかな色合いにしばらく見惚れ、加奈子さんはスマホを取り出して撮影を始めました。

そして、いい気分になって教室に着き、拡大鏡を取り出そうとしましたが、バッグの中に入っていないのです。加奈子さんは落胆してしまいました。

（落とすとしたら、スマホをいじっていた公園しかない）。加奈子さんは、教室の帰り道、急いで公園の管理事務所に向かいましたが、そのような物は届いていないとのことでした。（夫の形見をなくすなんて）。自分が情けなくなりました。

ですから、新しい拡大鏡を買うのも気がひけて、以後は目をしょぼしょぼさせながら作品と格闘していたのです。

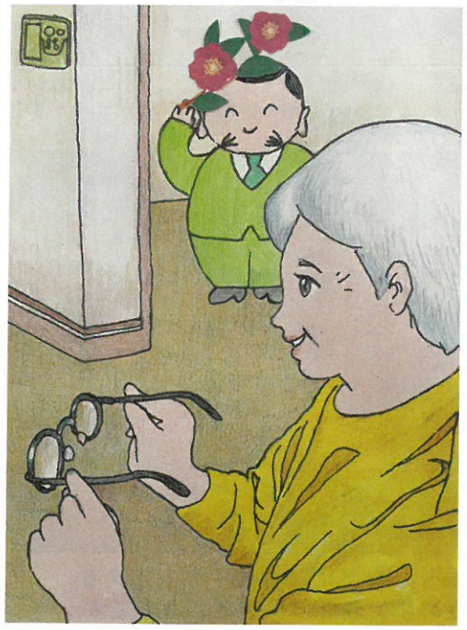
一ヶ月が経った頃でしょうか。見慣れない番号からスマホに着信がありました。恐る恐る出てみると、なんと公園事務所の方です。公園の整備中にそれらしい眼鏡があったというので知らせてくれました。半ばあきらめていた加奈子さんは、飛び上がって喜びました。

「夫のものであってほしい」。祈るような気持ちで事務所に行くと、係の人が奥から持ってきたのは、泥にまみれていてもまぎれもなく夫の拡大鏡でした。

「ありがとうございます。思い出の品なんです」。加奈子さんは拡大鏡を受け取ると、深々頭を下げました。

家に帰ると、拡大鏡を丁寧に洗い、柔らかな布の上に載せました。サザンカの作品とともに夫の仏前に供え、「またいっしょに行きましょうね」と手を合わせました。

（挿し絵・小出　茂）



高尾山 季節散歩

和風月名
霜月
「しもつき」

十一月は霜が降りるにはまだ早い時期ですが、旧暦では現在の十二月に相当するため、霜で一面が白くなり霜降月とも呼ばれていたそうです。

また、十月の神無月に対して、出雲に出かけていた神々が帰ってくるので、「神帰月」「神来月」という異称もあります。

今月の風物詩
イチョウ

イチョウは「公孫樹」や「銀杏」と書きますが、「銀杏」といえばイチョウの種子の「銀杏」を指すことが多いでしょう。

イチョウは八王子市の「市の木」であり、高尾駅前から追分交差点までの甲州街道沿いにイチョウ並木が続き、秋には黄金色へと街を彩る姿になると、道行く人々の目を楽しませてくれます。

一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

二十二段　自分と他人を比べない

自分と他人を比べ、落ち込んでしまった経験がありませんか。頭ではそんな比較は意味がないと分かっていても、割り切れない気持ちはあるものです。他人の物差しではなく、自分の考えで価値を判断するようにしてみましょう。

健康登山者投稿作品

季節の絵手紙
「ピラカンサ」

八王子市　石井　雅子

神道扶桑教管長
宍野史生様来山
十月六日（金）

去る十月六日、神道扶桑教管長宍野史生様が高尾山を訪れました。高尾山と扶桑教は富士山信仰を通じて御縁があります。

一行は当山書院にて佐藤貫首と親しく歓談後、無事に下山されました。

贈老人

老人崇拝三千遍
名句佳句天下光
山内打掃三百遍
爬須彌山句作忙

厚木市　荒井　一雄

山報に
毎月秀句
十五秋

老翁に贈る

九十八歳の老翁俳人は
登拝三千回…
名句・佳句、天下に光る…
山内清掃も三百回…
須弥山に登りつつも
句作に忙しき毎日？

星まつり祈祷のおすすめ

星まつりとは、毎年順を追って巡りくる九星にお祈りして、災厄を除き福運を招くご祈祷です。

高尾山では、**冬至に星まつり特別大護摩供**を厳修して、御信徒各位の諸願成就を祈念しております。

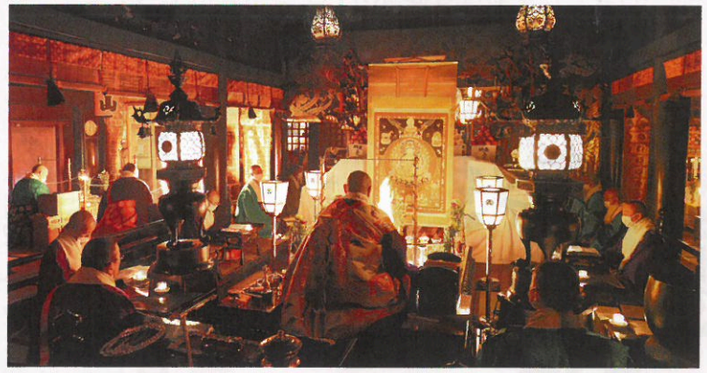
又、当山の星まつりの御札は**飯縄大権現、薬師如来、不動明王**の三尊を始め、殊に**九星、十二宮、二十八宿**等の諸々の曜星を網羅した**星曼陀羅**を内符として納めたお札で、御利益は誠に深重であります。

多くの御信徒の皆様にお申込みを賜わり、広大無辺のご加護に浴せられますようお勧め致します。

※年齢は来年の数え年（来年の満年齢に一歳加える）

ご祈祷料はお一人様千円。特別祈祷料は二千円以上となります。申し込み締め切りは**十二月八日**、冬至の祈祷終了後、お札を郵送致します。

祈祷申込希望の方はご連絡下さい。申込書や高尾山の御寶暦、振込用紙一式をお送り致します。



凶運	半吉運	大吉運	半吉運	大吉運	半吉運	凶運	凶運	半吉運	大吉運
●	◑	○	◑	○	◑	●	●	◑	○
羅喉星	**土曜星**	**水曜星**	**金曜星**	**日曜星**	**火曜星**	**計都星**	**月曜星**	**木曜星**	
此の星に当る人は運勢潜むも象にして諸事慎まざれば災難あり家内他人に口舌事多しなお病難に注意を要す信心堅固にして慎むべし	此の星に当る人は運勢漸く開くの象にして諸事準備なさば花綻ぶがの如くなれど怠らば災害事憂あり	此の星に当る人は幸運の象にして善業積めば目上の引立亦意外な利得あり口舌傷害などに注意すべし	此の星に当る人は運勢陰るの象にして黒き雲の為に清き月の光も隠るゝ如く何かと障りあり口舌争論傷害等用心すべし	此の星に当る人は盛運にして万事順調に運ぶ像なれども慢心すれば大吉反て凶となる信心して加護を得べし	此の星に当る人は疲労困憊の象にして災厄病難等に注意すべし信心して堅忍自重を要す	此の星に当る人は万事憂え多き象にして諸事思ふにまかせず至て心労多く損失離別病災などに悩む信仰厚ければ除災光明を得る	此の星に当る人は進展の象なれど過ぎたるはなお及ばざるが如しにして余り過ぎるは災いの基である信心怠らず精進すべし	此の星に当る人は除災招福の象にして万事好都合に運ぶなれど細心の注意を欠くと損失あり目上目下の意見を聞き性急を慎むべし	
三 碧	四 緑	五 黄	六 白	七 赤	八 白	九 紫	一 白	二 黒	
令和6年生 **1**	令和5年生 **2**	令和4年生 **3**	令和3年生 **4**	令和2年生 **5**	令和元年生 **6**	平成30年生 **7**	平成29年生 **8**	平成28年生 **9**	
平成27年生 **10**	平成26年生 **11**	平成25年生 **12**	平成24年生 **13**	平成23年生 **14**	平成22年生 **15**	平成21年生 **16**	平成20年生 **17**	平成19年生 **18**	
平成18年生 **19**	平成17年生 **20**	平成16年生 **21**	平成15年生 **22**	平成14年生 **23**	平成13年生 **24**	平成12年生 **25**	平成11年生 **26**	平成10年生 **27**	
平成9年生 **28**	平成8年生 **29**	平成7年生 **30**	平成6年生 **31**	平成5年生 **32**	平成4年生 **33**	平成3年生 **34**	平成2年生 **35**	平成元年生 **36**	
昭和63年生 **37**	昭和62年生 **38**	昭和61年生 **39**	昭和60年生 **40**	昭和59年生 **41**	昭和58年生 **42**	昭和57年生 **43**	昭和56年生 **44**	昭和55年生 **45**	
昭和54年生 **46**	昭和53年生 **47**	昭和52年生 **48**	昭和51年生 **49**	昭和50年生 **50**	昭和49年生 **51**	昭和48年生 **52**	昭和47年生 **53**	昭和46年生 **54**	
昭和45年生 **55**	昭和44年生 **56**	昭和43年生 **57**	昭和42年生 **58**	昭和41年生 **59**	昭和40年生 **60**	昭和39年生 **61**	昭和38年生 **62**	昭和37年生 **63**	
昭和36年生 **64**	昭和35年生 **65**	昭和34年生 **66**	昭和33年生 **67**	昭和32年生 **68**	昭和31年生 **69**	昭和30年生 **70**	昭和29年生 **71**	昭和28年生 **72**	
昭和27年生 **73**	昭和26年生 **74**	昭和25年生 **75**	昭和24年生 **76**	昭和23年生 **77**	昭和22年生 **78**	昭和21年生 **79**	昭和20年生 **80**	昭和19年生 **81**	
昭和18年生 **82**	昭和17年生 **83**	昭和16年生 **84**	昭和15年生 **85**	昭和14年生 **86**	昭和13年生 **87**	昭和12年生 **88**	昭和11年生 **89**	昭和10年生 **90**	
昭和9年生 **91**	昭和8年生 **92**	昭和7年生 **93**	昭和6年生 **94**	昭和5年生 **95**	昭和4年生 **96**	昭和3年生 **97**	昭和2年生 **98**	昭和元年生 **99**	
大正14年生 **100**	大正13年生 **101**	大正12年生 **102**	大正11年生 **103**	大正10年生 **104**	大正9年生 **105**	大正8年生 **106**	大正7年生 **107**	大正6年生 **108**	

いけばなの心 ㊺

華道教授　佐藤　宗明

十一月は山の木も紅葉し、秋が深まってきます。さらに暦の上ではまもなく立冬。季節は早くも冬になってきます。

今回は鮮やかに色づく紅葉を全面に使った生花新風体の作品をご紹介します。紅葉で色づく山々も素晴らしいものですが、その感動を一瓶の中に凝縮しようと試みました。

この作品では紅葉した葉の色をより強く印象付けるために、葉の面を正面に向けて生けています。また、紅葉に白い桔梗を合わせることでお互いの色合いを引き立てるようにしました。また、茎の長いエノコロ草がありましたので、空間に広がりが出るように、また晩秋の雰囲気が強く出るようにあしらっています。自然の草木から感じた感動をそのまま表現することができるのは生花新風体の良い所です。

今年は紅葉が若干遅れている地域もあるようです。昨今は秋の季節がどんどん短くなっているという話も聞こえてきます。それでもまもなく山を美しく彩ってくれるでしょう。

自然の美しさを愛でる事は古来、日本人が続けてきたことです。今後もかわらず続けていきたいですね。

花材：紅葉、桔梗、エノコロ草

高尾山報助成金志納者御芳名（順不同・敬称略）

八王子市　大山　泰
〃　倉石　芳和
さいたま市　洲崎　透
行田市　渡辺　宏
郡山市　美濃部　良
羽生市　岡戸　信雄
入間市　㈲建信工業
伊勢崎市　岩村　鎌市
港区　君島　良一
〃　中川　兼造
江東区　秋葉　三重子
大田区　金子　慎太郎
板橋区　㈲上信堂
〃　大沼　キエ子
練馬区　深谷　薫
日野市　太田　雄三
八王子市　石井　征二
〃　高橋　正久
八王子市　落合　義晴
町田市　小平　末喜
〃　梅原　良郎
東久留米市　吉岡　智代
多摩市　古屋　浩之
相模原市　小野沢　波枝
佐野市　荒居　幸子
さいたま市　大島　美恵子
〃　関根　三善
深谷市　根岸　憲司
秩父市　横田　一郎
邑楽郡　井達　立司
児玉郡　植井　実
加須市　坂本　隆志
狭山市　日野岡　保次
甲府市　清水　慶子
いわき市　新藤　孝弘
八王子市　石井　忠明
練馬区　稲毛　英子
高尾山健康登山者一同

いろは天狗の落し文 ㉞

え

栄枯盛衰
世の中の常
正直道を
歩まねば

物事が順風満帆に進んでいても、困難な状況に出会うものです。そんな時にこそ、自身の生き方が問われます。正直に生きてきた人であれば、誰かの助けがあったり、苦難を乗り切れる智慧をもっており、必ず道は繋がることでしょう。

登山だより

十二月行事日程

一日～七日
聖天秘供（聖天堂）

一日、十三日、二十五日
弁天秘供（御本社）

二日
月例写経会
（十三時山麓不動院）

五日、十二日
御詠歌勉強会
（十時山麓不動院）

八日
釈尊成道会（仏舎利塔）

十三日
山内大掃除（すす払い）

十八日
おみがき

十九日
納札供養柴燈大護摩供
（十三時祈祷殿広場）

二十一日～二十二日

星まつり祈祷会
二十一日　午後五時開白
二十二日　午前六時結願

二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
（九時大本堂）

二十八日
奥之院開扉供養
（十時奥之院）

三十一日
大晦日・二年参り

★お知らせ
十二月十三日は「山内大掃除」十八日は「おみがき」の為、午前中の御護摩修行は時間と場所を変更する場合がありますので、御了承下さい。

毎日のお護摩奉修時間

午前9時30分
〃　11時00分

午後0時30分
〃　2時00分
〃　3時30分

ご講中・団体等御相談下さい。

新春特別開帳大護摩供
元旦御護摩札 申し込み御案内

令和六年元旦、午前零時より高尾山では、新春特別開帳大護摩供修行が厳修されます。御信徒の皆様には、元旦に参拝されて大本堂で執り行われるこの修行に参加されることを、お勧めしております。

また、御信徒様各位の都合により高尾山へ御来山頂けない方の為に、元旦御護摩札を郵送でのお取り扱いをいたしております。

お申込みを御希望される方は元旦御護摩係まで御連絡頂きますと、申込用紙をお送りいたします。同封されている返信用封筒に、申込用紙を同封頂き、**十二月十日**までに必着するようにご投函頂きますよう、お願い申し上げます。

尚、元旦御護摩札の発送は、**一月三日**以降を予定しております。

■申し込み締め切り
十二月十日必着

■お問い合わせ先
電　話　〇四二-六六一-二一一五
FAX　〇四二-六六四-一一九九
高尾山薬王院・元旦御護摩係まで

高尾山報助成金 御志納のお願い

当山では、大護摩修行等により御縁を結ばれた御信徒様に高尾山報を送っております。

引き続いてご愛読されますよう、皆様方の助成金御志納をお願い申し上げます。

高尾山薬王院ホームページ
https://www.takaosan.or.jp
下記のQRコードから高尾山薬王院のホームページにアクセスできます

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号　193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人　犬山秀康
編集人　菅井倫浩
印刷　ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円